

〈論文〉

## アイヌ語千歳方言における推量の助動詞nankorの意味について

佐藤 知己

- 目次
1. はじめに
  2. 推量のモダリティについて
  3. 日本語の「だろう」について
  4. nankorに関する先行研究
    4. 1. 金田一京助
    4. 2. 知里真志保
    4. 3. 田村すず子
    4. 4. 萱野 茂、奥田統己、中川 裕、佐藤知己
    4. 5. 先行研究のまとめと問題点
  5. 千歳方言のnankorの用法
    5. 1. nankorの基本的用法と問題点
    5. 2. 発話者の直接知覚とnankor
  6. おわりに

キーワード: モダリティ、推量、nankor、「だろう」

### 1. はじめに

筆者は佐藤(2008)においてアイヌ語千歳方言の基本構造を略述したが、「概説」、「入門書」という性格上、全体的な枠組みを述べることを優先して、細部に関する議論は棚上げとせざるを得なかった。なかでも、一般に「機能語」と呼ばれるような各種助詞、助動詞、名詞化辞、およびそれらが組み合わされて作られた様々な一種の慣用表現の用法に関しては問題が多く、細部まで議論を十分に尽くすことができなかった。これらの形式の取り扱いの難しさは、その多くが「モダリティ」に関わる意味を表すものであることに原因の一つがあると思われる。モダリティは発話者の心的態度を表す言語形式であるが、その内容は千差万別であり、言語ごとの差異も少なくない。母語話者は諸形式を正しく使うことはできても、それらの使い分けを説明することはできないのが普通である。母語話者に調査したから使い分けがたちどころに明らかになる、というわけにはいかないところにこの問題の難しさがある。以下では、アイヌ語のモダリティに関わる形式の中から、nankorという助動詞の用法を取りあげ、記述上の問題点を明らかにする。同時に、アイヌ語のモダリティ研究に関して今後の方向性を模索することを意図するものである。

## 2. 推量のモダリティについて

nankorという形式は、しばしば推量の助動詞と呼ばれ、「だろう」と訳されることが多い。「推量」という意味、機能は、一般に「モダリティ」という文法カテゴリーに属するとされるものである。nankorという形式について詳しく論ずる前に、モダリティという文法カテゴリー一般について簡単に見ておくことにする。

モダリティの定義は、理論的な立場によって細部の違いはあるものの、たとえば日本語の研究においては以下のようなものが一般的な定義の代表的なものであろう。

我々が、一定の内容について述べる文を構成するには、その内容となる事態に対して、文として様々な「述べ方」、すなわち発話の様式(mode)を選択しなければならない、言い換えれば、話し手が独立した言語行為をするなら、その事態に対する話し手の把握の仕方は必ず表示されなければならないのである。そこで、文は二つの要素に分けることができる。一つは、述べる内容として文の中核を構成する事態(言表事態)である。これは「コト」あるいは命題(proposition)とも呼ばれる。もう一つは、「述べ方」「発話の様式」を表す部分である。これはモダリティ(modality、ムードmoodという用語を同じ意味で使う研究者もある)と呼ばれる。

森山他(2000: 4)

すなわち、文を構成する要素のうち、「述べ方」、「発話の様式」を表すものがモダリティを表す要素、ということになる。さらに、森山他(ibid.)によるモダリティの区分を示せば以下の通りである。まず、モダリティは依頼、問いかけのような機能を表す「発話・伝達のモダリティ」と、話し手の命題に対する把握のあり方、捉え方を表す「命題めあてのモダリティ」とに大きく分かれる。推量のモダリティは、話し手が「想像、推論」に基づいて命題を捉えているわけなので、「命題めあてのモダリティ」ということになる。「命題めあてのモダリティ」は、さらに「認識(epistemic)モダリティ」と「当為評価(deontic)」のモダリティに分かれる。「認識のモダリティ」は、「判定のモダリティ」と「伝聞」に分かれる。「判定のモダリティ」は「判定」と「疑い」に分かれ、「判定」はさらに「確言」と「概言」とに分かれる。推量は「想像、推論」に基づくので、当然、「概言」に属することになる。「概言」は「推量」のほか、「蓋然性判断」、「徴候性判断」とに細分化される。結局のところ、「推量」というモダリティは、広い意味での「概言」のモダリティに属し、意味的に接近しつつも「蓋然性判断」、「徴候性判断」という他のモダリティと対立関係にあるもの、ということができる<sup>1</sup>。なお、森山他(ibid.: 116)によれば、確言は「確認」と「確信」とに分かれ、「確認」が「事態の成立・存在を、話し手の感性的な体験や記憶の中に直接的に捉える」ものであるのに対し、「確信」は「事態の成立・存在を想像・思考や推論の中に捉える」が、推量と異なり、「事態成立を確かなもの・その事実性を主張しうるものとして捉える」ものであるとする。もちろん、これらのモダリティの区分は、日本語に基づくもので、これがアイヌ語にもそのまま適用できるかどうかは大きな問題であるが、作業上の目安として以下ではひとまず日本語のモダリティ区分

を用いてアイヌ語の推量の助動詞の位置づけを探ってみることにする<sup>2</sup>。

### 3. 日本語の「だろう」について

具体的な分析に入る前に、アイヌ語のnankorの分析において有益と思われる「だろう」の諸特徴を以下に挙げる<sup>3</sup>。

益岡(1991: 111)は「だろう」を「断定保留」の形式と位置付ける。また、益岡(ibid.: 113)は、「太郎も送別会に参加するだろうことがわかった」のような文は許容度が低いということを根拠に、「だろう」は客観性の高い表現の内部に現れにくく、「主観的な表現として機能する」と述べている。

森山他(2000: 94)は「推量」を「事態の成立・存在を不確かなものとして、自らの想像・思考や推論の中に捉えたもの」と規定する。そして、森山他(ibid.: 62-65)は、「だろう」が他の推量形式と異なる特徴として、「疑問文になる」という点を挙げている。例えば、「きっとどこに違いない」は不適格だが、「どこだろう」は適格な文である。また、「今何時だろう」という疑問文が独り言としても許容されることに着目し、必ずしも聞き手から情報を得ることによって「確定的な結論を出さなくてもよい」という特徴を持つ、と述べ、この特徴を「判断形成過程」を表す、としている。たとえば、「昨日、雨が降っただろう」は通常は不適格な文であるが、「昨日この地方で雨が降ったから、あの地方でも、雨が降っただろう」のように、未知の空間を設定して確認できない情報内容を扱う、という文脈にすれば適格となる。このことは、「だろう」を用いるには過去のことをあえて不確実なこととして判断する、という条件が必要であることを示しており、従って「だろう」は最終的な結論ではない、判断形成過程にあることを示す形式である、としている。

また、鍵を締めたかどうか記憶が不確かな場合に、「締めてこなかっただろう」とは言えないことを指摘し、記憶を呼び起こせばいいだけの事態には「だろう」が使えないのは、推量が「想像し、思考し、推論することで、事態の成立・存在を捉えている」からだ、と述べている(ibid.: 117)。これに対して、「蓋然性判断」に属する「かもしれない」は、「締めてこなかったかもしれない」のように言うことができるので、「だろう」とは異質のモダリティを表す形式であり、「確からしさの度合いへの言及」を表す、と述べている(ibid.: 131)。また、「徴候性判断」に関しては、「存在している徴候や証拠から引き出され捉えられたもの」を表すとし、たとえば、「あの飛行機、飛び立つだろうが、本当に飛び立つかな」が適格性において劣るのに対して「あの飛行機、飛び立つらしいが、本当に飛び立つかな」は適格である、ということから、「だろう」は事態成立を認識の中に捉えているので、それをすぐさま放棄するような表現は自己矛盾を引き起こすことになるので不適格になり、他方、「らしい」は徴候や証拠に基づく表現なのであり、従ってそれらの徴候や証拠を

<sup>1</sup> 日本語のモダリティの体系としては種々のものが提案されていると思われるが、森山他(2000)の枠組みをここで取り上げたのは「だろう」と対立する下位類を明確に立てているという点でアイヌ語のnankorとの対照作業を行うのに便利であると考えたことによる。

<sup>2</sup> より一般的な観点からモダリティを論じたものとしては、たとえばPalmer(1986)があるが、モダリティを大きく「認識(epistemic)」と「当為評価(deontic)」に区分する基本的枠組みはここでの枠組みと同一である。

<sup>3</sup> ここで言及した「だろう」の諸性質は、諸家の広範かつ膨大なそれぞれの研究のうちのごく一部分を便宜的に抜き出したものに過ぎない。理解の足りない点や見落としも多いであろう。専門家の御教示をお待ちする次第である。

疑ったり、放棄すること自体は自己矛盾にならないので適格となる、と説明している (ibid.: 142)。

宮崎他 (2002: 122) は、「だろう」の性格として、「かもしれない」や「らしい」などの他の関連する意味を表す形式と異なり、「常に発話行為時における話し手の推量を表す」こと、森山他 (2000) 同様、「だろうか」という疑問の形を持つ、という点を挙げている。また、「だろう」が、「だろうか」という疑問形を有し、「おそらく…だろう」のように確信の度合いを調整する表現と共起可能であることなどを根拠に、「だろう」を「想像・思考という間接的な認識によって、現実を捉える形式」であると規定している (ibid.: 135)。

加藤 (2006: 63) は、宮崎他 (2002) と同様、「発話時点における発話者の推量を意味する。一般に発話時よりも未来の出来事か、発話時点で確認のしようがない事象をマークし、確定している事実にはつかない」と述べ、「昨日は、雨が降っただろう」という文に関して、「話者が確認できない土地でのことか、前日の天候を確認できない状況にあった場合でなければ使えない」と述べている<sup>4</sup>。

「だろう」に関する以上の諸点をおおまかにまとめると以下のようになる。

- i) 推量 (「断定保留」、「判断形成過程」、疑問文で生起可能)
- ii) 主観的表現 (客観的表現の内部に現れにくい)
- iii) 徴候性、蓋然性とは異なる意味を表す (途中放棄不能、疑問形可能)
- iv) 発話時点的 (確定した事実に付きにくい)

これらすべての点をアイヌ語の *nankor* に関して検証することは必ずしも容易ではないが、以下ではできる限り念頭において考察を進めることにする。

#### 4. *nankor*に関する先行研究<sup>5</sup>

千歳方言の *nankor* の分析に入る前に、*nankor* に関する主な先行研究をみておくことにする。

##### 4. 1. 金田一京助

金田一 (1931: 182) の *nankor* に関する記述は以下の通りである。

§ 273 想像には助辞 *nankor* (だらう) を用ゐる：—

Yaishitoma ki *nankor*, 羞しき思をするだらう。

<sup>4</sup> 言うまでもなく、日本語学は一大分野であって、この分野の最新の見解を知るのは基本概念であっても容易でない。その意味で加藤 (2006) は一般向けの教科書ではあるが、専門家による最新の概説であるので、あえてここで引用した。

<sup>5</sup> 表現や結論が違っても、自説と共通する重要な論点が既に他の研究者によって指摘されていることに触れないのは、他人の考えたことをあたかも自分自身が考えたことであるかのように述べているのと同じ行為である。研究者としては致命的である。もっとも、注意はしていても先行研究の真意を誤解したり、当然、言及すべき重要な研究を見落とす、ということもないとは言えない。今回の論文でも他の論文でもそういう不当な点がもしあれば、率直にお知らせいただきたいと思う。筆者自身は誤りや見落としを認めるのにやぶさかではないつもりである。

Shiknu kunip somo-nenankor, 生くべきことにはならぬだらう。

Shinutapka ta areshpa kamui pakno neyakun poro nankorkusu

大河内 に 育てられてる 神さま もうこれまでにあったれば大きくなつたでせうから

aekte yak ne anukar kusu-ne. Iresu-acha nukare chiki nekon

およこし下さるれば 我々逢ひ ませう 小父さんに 見せ たらどんなに

namne uwomap shiri okanankora?

ほんとに 可愛がりなさる こと でせう か

Nei-ta tapne kotan an awa moshir an awa shir-annankora, upeka-

どこに 本当に 村があつて 國があつて かうあるだらうか 平均な

toine chiupekare!

土地に 均らされてゐる

Kusuri-sak-pe Ainu ne kusu wakka kamui orowano wakka kor wa

薬無きもの アイヌである 故 水の 神の ところから 水を 持つて

ek wa hekachi anire yakne kusuri korachi nei wa pirkanankor.

来 て子供に やる ならば 薬 のやうに そこ から 直る であらう

“E-arpa yakne chise makke nankor wa e-ahun chiki ram-itanchiki

汝行く ならば 家が 開く だらう から 汝入る なら 低い板敷

an, ri itanchiki an nankor kusu, nea ri itanchiki kashi e-oma wa

あり 高い板敷 あるだらう から 其の 高い 板敷 の上 汝あがつて

eoripak wa e-onkami kor tapne kane an-pe kusu omanan-kur a-ne

汝つ、しんで 汝禮拜しつ、 斯様斯様に ある事にて 旅をする旅人で (私) ある

ruwe-ne sekor e-itak yak-ne Chup kamui ene ne-kuni ye nakon

のでございます と 汝云ふ ならば 日の神は 斯く斯くと 云ふだらう

na, hokure arpa!” sekor Nishatcha-ot kamui i-ye kor sui kampi

から さあ 行け と あかぼしの 神が 私へ云ひ つ、 また 手紙を

i-kore.

私へくれた

§ 274 未来の行為を想像して対者へ臨むに、自分の動作へ添へると約束になり、相手の動作へ添へると軟い命令文に進む：－

Sonno hetap a-yuputari wenno-kashpa haukekashpa ki rok oka!

まことやこれわが兄だち 餘りに見苦しく 餘りにいふ甲斐なく し玉ひたるものかな

Eorsetakko rorumpe patek eritne-shukuppe yaunkun nishpa Oman-

まるで永く いくさ ばかり 悩みつづけたる 本州人の 首領 (と) オマン

peshka-un-kur ne a hike anrapoki echi-kar shiri tapan-pe ne ya!

ペシカびと なりしに 全敗を し玉ふ もの なる か や

Ruino shicarpa echi-ki nankon na.

なんと 奮ひ 玉ふ べき ぞ

Ki wa ne yak-ne ku-keutomorke e-koshiratki e-ko-onkami ku-ki

さうして(下さる)なれば 私の心の中の所に 汝を護りとし 汝を禮拜 (私)する

nankon na.

であらう

歎辞になつてしまふ：－

Chashi hetap pirka ruwe-annankor (y) a!

山城 かこれ 美しい こと かな

此は、やはり想像の nankor である：－

Chasi tap-an na, (tap-an=ne 「である」)。

Chasi he-tap annankor'a, チヤシであらうか。

Chasi pirka ruwe-an, (ruwe-ne はことばる意、ruwe-an は詠歎)。

此が組合つて：－

Chasi he-tap pirka ruwe-an nankor(y) a!

チヤシ にや (あらん) [何と] 美しいことなの だらう か

金田一の記述は、その後の nankor の記述の核になるような内容を既に含んでいる。すなわち、「想像」(推量)、「命令」(二人称主語、及び助詞 na が後続する場合)、「約束」、「歎辞」(感嘆)のような意味を表すことが述べられている。

#### 4. 2. 知里真志保

知里(1936 [1974]: 132) の nankor に関する記述は以下の通りである。

##### i) 想像の助詞

e-kikkik ko nani rayayaise nankor

汝 叩け ば すぐ 彼泣く だらう

##### ii) 柔かな命令

e-chi-ki nankorna. お前達はするんですよ。

##### iii) 反語

`achikara-ta wenkur hekachi toan chikappo kamui chikappo akor

あらかしや 貧乏人の 子 あの 小鳥 神様の 小鳥は 俺達の

konkani-ai ka somo uk ko, e-nepkor-an wenkur hekachi kor yayan  
 黄金の矢でさへも お取りにならないのに お前のやうな 貧乏人の 子 の たゞの  
 ai munin-chikuni-ai toan chikappo kamui chikappo shino shino uk  
 矢 朽ち 木の 矢をあ の 小鳥 神様の 小鳥が さぞさぞ お取りになる  
 nankor na!"  
 だらうよ

知里(1942 [1973]: 566)の記述は以下の通りである。

nankor 樺太では nankox

I 想像。「…だらう」。ijotta pirka~. <一番好いダラウ> (「資料一」 p.3)。naが附いて意味が重くなる。この際nankor na> nankon na と変化する。eani ne-jakka e-nu ~~, <君も聞いたニチガヒナイヨ>。II 稍丁寧な命令。「…し給へ」。殆ど常に nankon na の形式をとり、常に第二人称の用詞に附く。hokure mojmojke e-ki ~~, <さあ動くことを君し給へ (さあ動いて見タマへ)> III 反語。「だらうよ」。殆ど常にnankor ūaの形式をとる：- sino e-e-pirka ~~, <さぞかしお前・それで・儲けるタラウヨ (民譚) p.6)。sino sino uk ~~!<さぞかし さぞかし (彼) 取るタラウテ> (「神謡」 p.4)。IV nankora (イ) 疑問「…だらうか」。<nankorja. nekon namne e-e-pirka siri an~<どんなにまあお前・それで・儲けることタラウカ> (「民譚」 p.26)。 (ロ) 反語「…だらうよ」。<nankora. sino e-e-pirka siri an ~! (同、p.40)。nankorはnan-korで、nanは「顔」、korは「持つ」、さういふ顔つきをしてゐる、さういふ見かけをもつてゐる、の様子である、といふ風にして、「だらう」といふ意味になつたものと思はれる。

知里の記述は金田一の記述と基本的には共通していると言つてよいが、より精密化、細分化がなされたものになっていると言える。なお、金田一が指摘していない点として最も注目されるのは、想像(推量)と並んでnankorに「聞いたにちがいないよ」のような「蓋然性判断」に当たる訳語を当てていることである。この点は次の田村(1960)と共通するが、nankorの意味、機能を考察する上で注目すべき指摘であると思われる。

#### 4. 3. 田村すず子

福田 [田村] (1960)、田村(1996)のnankorに関する記述は以下の通りである。

その行動が行われるであろうとの表現者の想像<…だらう>。現在のことも未来のことも過去のこともかまわない。また'a'an (§ 8)とちがって推定の根拠はなくてよい。日本語の「だらう」よりは確かさが小さい。時には「…かもしれない」と訳せる。英語のperhapsぐらいの確かさではなかろうか。

sino 'esinki nankor.  
ほんとに おまえつかれた でしょう

tayko ki hum ka 'anu rusuy sekor haw 'oka  
太鼓を 打つ 音 も 聞き たい と 云っていた  
wakusu tayko anak an nankor. yakka tayko sekor yepa.  
から 太鼓 は あった のでしょう でも「たいこ」と云っていた

'ek nankor kur  
来る であろう ひと

pirkano sone 'itak 'ipehe 'oma  
よくほんとに ことばの なかみが はいった  
nankor a.  
でしょうか

田村(1960: 350)

nankorナンコロ【助動】(語源的には [nan-kor 顔・を持つ] であろう。)…だろう(推量、予言)。nankor na ナンコンナ (1)…するだろうから/…するだろうよ。nen ne yakka kokanu uske ka okanankorna ネン ネ ヤッカ コカヌ ウシケ カ オカ ナンコンナ どのようであっても傾聴する所もあるだろうよ/だろうから。(W会話) (2) …しなさいよ(予言の形をとった命令表現の一つ)。ney ta pakno nisasnu mintum e=kor wa e=annankorna ネイタ パクノ ニ サシヌ ミントウムエコロ ワ エアン ナンコンナ どうかいつまでも健康な体を持っているんですよ(=いなさいよ)。[NZ挨拶] {E: probably.}

田村(1996: 405)

上の引用から明らかなように、田村(1960)は、「推量」のほかに「かもしれない」という「蓋然性判断」の意味をあげている。この点は、「ちがいない」という訳語を挙げている知里(1942)と共通性を持つと言える。なお、ここでは引用しなかったが、田村(1988b)のnankorの記述は、基本的には田村(1960)と異なるところはないようである。

#### 4. 4. 萱野 茂、奥田統己、中川 裕、佐藤知己

これまで挙げた記述の他にもnankorについて触れたものはいくつかある。それらのうち主要なものをいかにまとめる。

中川(1995: 294)の説明は以下のようなものである。

ナンコロ nankor 【助動】 ～だろう。

アツカリ アイフナラ カ ソモ キ ナンコロ akkari a=i=hunara ka somo

ki nankorこれ以上は私を探さないだろう [N9103081.UP]

ネ ヒ アナツネ エエランペウテッ ナンコロ ne hi anakne e=erampewtek nankor

そういうことは、あんたわからないだろう [N9111100.CON]

萱野(1996: 340)の説明は以下のようなものである。

ナンコロ 【nankor】

～であろう、～はず。エッ ナンコロ=来るであろう。アッパ ナンコロ=行くであろう。エ・オナハ イペルスイ コロ イワッ ナンコロ ナ ホ クレ アペ アリ。ク・スケ クスネ ナ=お前の父が腹を空かせて帰って来るだろうから早く火を焚け、私が煮炊きをするから。

奥田(1999: 85)の説明は以下のようなものである。

nankorナンコロ 【助動詞】 用例数: 237

1. (推量を表す) (…する) だろう
2. (話者の希望や命令を表す) (…する) べきだ、(…し) なさい

佐藤(2008: 193)の説明は以下のようなものである。

推量の助動詞nankor:

動詞人称形+nankorで、「～するだろう」という意味を表す。

nisatta anak sirpirka nankor「明日(nisatta)は(anak) 天気が良い(sirpirka) だろう(nankor)。」

nankorは未来の事象についての推量を表すが、現在や過去の事態についての推量を表す場合にも用いられる。

ukuran iyotta mean humi nenankor.「昨晚(ukuran)、一番(iyotta)寒かった(mean) 気配である(humi ne)のだろう(nankor)。」

tutko rerko siran yakun pirkanankorpe ne wa.「二日三日(tutko rerko) 経て(siran) ば(yakun) 良くなる(pirka) だろう(nankor) 筈ですよ(pe ne wa)。」

tane sirsak humi nenankor, sirpopke kusu.「もう(tane) 夏になった(sirsak) 気配である(humi ne)のだろう(nankor)、暑い(sirpopke) から(kusu)。」<sup>6</sup>

萱野(1996)は「だろう」という推量の意味に加えて「はず」という、事態成立の蓋然性を表す「蓋然性判断」に属する意味も挙げている点が注目される。奥田(1999)は伝統的な枠組みに忠実な説明と言える。佐藤(2008)は田村(1960)同様、過去、現在、未来のいずれに対しても *nankor* が使われることを示している。とはいえ、これらの研究も、基本的には「だろう」という訳語を挙げて *nankor* が推量の形式であることを示しているという点では共通している。

#### 4. 5. 先行研究のまとめと問題点

以上から明らかなように、先行研究はいずれも「だろう」という訳語を挙げていることから、*nankor* を推量(想像)を表す形式とみなしていると言ってよいであろう。とはいえ、田村(1960)は「かもしれない」、萱野(1996)は「はず」のような蓋然性判断の意味も挙げており、これらは *nankor* が「だろう」という推量の枠組みに収まり切らない側面を持っている可能性を暗示するものと言える。

先行研究において最も問題な点の一つは、田村(1960)、佐藤(2008)が「だろう」が現在、過去、未来いずれの意味に対しても用いられる、と述べている点である。一見、この説明には何の問題もないように思われるが、実は重大な問題が含まれている。田村(*ibid.*)は「太鼓はあったのでしょう」、佐藤(*ibid.*)も「寒かった気配であるのだろう」(一下線佐藤)としていて、「太鼓はあっただろう」、「寒かった気配であっただろう」とはしていない。すなわち、*nankor* には「だろう」(現在、未来の出来事に言及する場合)の他に、「のだろう」という訳が適切となるような場合(過去の出来事に言及する場合)とがあるわけだが、これまでの研究では、訳語の違いとして漠然と意識はされていたが、両者を区別せずに、暗黙裡に、あたかも何の違いもないかのように「だろう」という項目の下で一括して扱っていたわけである。日本語の場合、過去形に直接「だろう」を付加することは無条件に可能というわけでない。すなわち、「ただだろう」とすると、「父親が生きていたら就職のままならない言語学を勉強することなど決して許さなかつただだろう」のように、実現されなかつた事象の仮想を意味する形式となってしまう。すなわち、「ただだろう」は過去の推量の形式としては通常は用いられない<sup>7</sup>。ところが、アイヌ語の *nankor* は「だろう」と違い、動詞に直接付加されて過去の推量を表す場合があることになる。もしこれが事実であるとすれば、*nankor* を「だろう」と単純に同一視することはできないことになるが、実際はどのようなのであろうか。このように、*nankor* の記述にはまだまだ問題が残っている、ということができよう。

### 5. 千歳方言の *nankor* の用法

#### 5. 1. *nankor* の基本的用法と問題点

以下では、筆者が調査した千歳方言の資料に基づいて、*nankor* の用法を検証してみることにする<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 佐藤(2008: 193)では語彙の説明が一部脱落しているが、ここでは補ってある。

<sup>7</sup> もっとも、日本語の「だろう」同様、過去のことであっても不確実な事象に関しては *nankor* を直接動詞に付加することが可能である、という可能性もある。この点については注11も参照されたい。

千歳方言には、先行研究で既に指摘されているような推量の用法のnankorの例が見られる<sup>9</sup>。

- (1) eci-mismu nankor. sine kamuyyukar ku-ye so.  
 2PL.SUBJ-淋しい だろう 一つの 神謡 1SG.SUBJ-言う かな  
 「お前達は淋しいだろう。一つ神謡を私は言おうか。」

- (2) hetuku wa an nankor sekor ku-yaynu kusu  
 出る て いる だろう と 1SG.SUBJ-思う ので  
 ku-nonkar hawe un.  
 1SG.SUBJ-見廻る 話 よ  
 「(キノコが) 出ているだろうと私は思うので見まわると言っているんだよ。」

- (3) ku-horari ruwe nukan rusuy utar arki  
 1SG.SUBJ-暮らす 事 見る たい 人達 来る  
 hawe ne nankon na. arki yakka pirka wa.  
 話 である だろう よ 来る ても 良い よ  
 「私が生活する有様を見たい人達が来るという話でしょうよ。来てもいいよ。」

- (4) tane sirsak humi ne nankor, sirpopke kusu.  
 今 夏になる 感じ である だろう 暑い から  
 「今や夏になった気がするだろう、暑いから。」

- (5) nisatta anak sirpirka nankor.  
 明日 は 晴れる だろう  
 「明日は天気がよいだろう。」

(1)、(2)、(3)、(4)は現在の事象についての推量を表している。これに対し、(5)はこれから起こる未来の出来事に対する推量を表している<sup>10</sup>。また、知里(1942)、田村(1960)に挙げられている例文同様、過去を意味する文にnankorが用いられている例もある。

- (6) ukuran iyotta mean humi ne nankor.  
 昨夜 一番 寒い 感じ である だろう  
 「昨夜、一番寒い気配であっただろう。」

<sup>8</sup> 千歳方言の資料は故白沢ナベ氏からご教示いただいたものである。ここにお名前を記し、感謝申し上げる。

<sup>9</sup> 使用した略号は以下の通り。1=一人称、2=二人称、INDEF=不定人称、LIT=雅語、SG=単数、PL=複数、SUBJ=主格、OBJ=目的格、INTR=自動詞、TR=他動詞。

また、主に主文に従属する補文として用いられるが、**nankor**に疑問の助詞 (a<ya「~か」) が付いて疑問表現になる例もみられる。

- (7) toankur mos ruwe ne nankor a  
あの人 目覚める 事 である だろう か  
mokon ruwe ne nankor a a-eramuskari  
眠る 事 である だろう か INDEF.SUBJ-わからない  
「あの人、目を覚ましているのであろうか、眠っているのであろうか、わからない。」

- (8) rik peka he e-kus cik tunas nankor a,  
上 通って か 2SG.SUBJ-通る たら 早い だろう か  
raw peka he e-kus cik tunas nankor a.  
下 通って か 2SG.SUBJ-通る たら 早い だろう か  
「高い所を通ったら早いだろうか、低い所を通ったら早いだろうか。」

次の例では **nankor**の後に **ruwe**「事」という客観表現を作る要素が来ているが、このような例は今のところこの例一例しかない。

- (9) tane aynu mat a-kon ruwe ne sekor an pe  
今 人間 妻 1SG.SUBJ.TR.LIT-持つ 事 である と ある もの  
i-koosikoni ruwe ne nankon ruwe ne kor  
1SG.OBJ.LIT-突きとめる 事 である だろう 事 である て  
「今や人間の妻を私が持ったのであるということ突きとめるのであるだろうのであると」

以上の例文を見る限りでは、千歳方言の **nankor**の意味、用法は、先行研究で既に述べられているものとはほぼ同一であり、かつ、日本語の推量の助動詞「だろう」と種々の点でよく似ていることがわかる。すなわち、(7)、(8)のように疑問表現になることができることから、徴候性や蓋然性とは異なる「推量」の意味を表す可能性が高いことがわかる (3節末尾の i、iii 参照)。また、(9)のように客観的表現の内部に現れにくい点も「だろう」に類似している点である。

さて、問題は「発話時点性」である。すなわち、先行研究において、**nankor**は過去の事象の推量にも用いられることが指摘されており、これは日本語の「だろう」とは異なる点である可能性について触れたが、実は千歳方言の用例を調査してみると、**nankor**が過去の事象に関して用いられている例はやはり極めて少ない。(6)のような例はあることはあるけれども、田村(1960)が挙げているような **tayko anak annankor**「太鼓はあったのだろう」のような例は筆者の採録資料にはこれ

<sup>10</sup> (4)、(6)は発話者の直接経験なので「だろう」は本来はおかしい。この点については後述。

までのところ見つかっていない。また、田村(1992)によって、田村(1984-1989)の用例を検索し、過去の事象に関する推量を表した例がないか確認したが、田村(1960)が用いているのと同じの例 (*tayko anak annankor*「太鼓はあったのだろう」) が一例あるのみであった。つまり、田村(1960)のあげている例が、田村(1992)に関する限りは唯一例なのである。もっとも、さらに大量の資料を調査してみる必要はあるが、少なくとも、今のところ、この種の用法はそれほど一般的な用法とは言えない、ということは許されるであろう。過去の事象に *nankor* を用いるには、例えば次のように *nankor* の前に *ruwe ne* 「事だ、のだ」を併用するのが普通である。

- (10) e-tekehe            eytasa        racitke        wa racitke        e-tekehe  
 2SG.SUBJ-手    あまりに    垂れ下がる    て 垂れ下がる    2SG.SUBJ-手  
 ku-tuye            wa    e-ruska            kusu    e-hecirasa  
 1SG.SUBJ-切る    て    2SG.SUBJ-怒る    ので    2SG.SUBJ-咲く  
 ka somo ki    ruwe ne        nankor    wa kusu...

も ない    する    事        である    だろう    て    ので

「お前の枝があまりに垂れ下がったから垂れ下がったお前の枝を私が切ったのでお前が怒ったから、お前は咲かなかったのだから…」

以上の点も、日本語の「だろう」の示す特徴とよく似ていると言える (3節末のiv参照)。結局のところ、千歳方言の *nankor* について、佐藤(2008)が「過去の推量にも用いられる」として、結果的に日本語の「だろう」とは異なる性質を持つ、としているのは、実は妥当性を欠く可能性のあることが明らかとなったわけである。

ここまでのところでは、千歳方言の資料に現れる *nankor* と「だろう」とは、細部に至るまでかなりよく似た性質を示す、ということになるであろう。中でも、確定した出来事に対して用いにくいという点は重要である (同様のことは、沙流方言に関しても当てはまる可能性がある)。そこで問題となるのが、数が少ないとはいえ、過去の事象を意味する動詞に直接 *nankor* が付加されている事例をどう考えるべきか、という点である。おそらく、可能性は二つあると考えられる。

i) *nankor* が過去の事象に関する推量に用いられるのは、何らかの文脈的条件が満たされた場合に限られる。

ii) *nankor* には実は推量とは異なるモダリティの意味がある。すなわち、確かに *nankor* は日本語の「だろう」と多くの点で共通する意味を持つが、部分的には異なる性質を示す場合がある。

<sup>11</sup> 田村(1960)の例は、過去の事象ではあるが、間接的な不確実な情報である (「太鼓の音も聞きたい、と言っていたから太鼓はあったのだろう」)。既にしばしば述べているが、このような場合は日本語の「だろう」も使用可能であることは、森山(2000)、加藤(2006)で触れられている通りである。従って、この点に関する限りは「だろう」との類似性を支持する例ともみることができるとは、用例が少ないのでここではこれ以上は立ち入らない。

i) に関してはこれまでに得られている用例が少ないため、遺憾ながら十分な考察を行うことができない<sup>11</sup>。これに対してii)は、ここまでみてきた「だろう」との強い類似性に対して、ある意味、逆行するような解釈ではあるが、実は全く根拠のない選択肢とも言えない点がある。以下ではii)の可能性について関連する現象を考察することにする。

## 5. 2. 発話者の直接知覚と nankor

これまで述べてきたように、「だろう」と nankor とは多く点で共通する特徴を持つことわかったが、千歳方言の nankor の用例を詳しく検討してみると、過去の事象の推量の問題の他に、実はもう一つ興味深い問題があることがわかる。それは「発話者の直接知覚」の問題である。(6)で用いられている humi ne という形式は、発話者の内部感覚を表す形式である<sup>12</sup>。類例を以下にあげる。

- (11) poyseta en-sam ta ek humi ne  
 子犬 ISG.OBJ-側 に 来る 感じ である  
 kunak ku-ramu kor "suy e-tustuye wa  
 ように ISG.SUBJ-思う つつ また 2SG.SUBJ-綱を切る て  
 e-ek a ruwen" sekor ku-ytak kor...  
 2SG.SUBJ-来る た 事 と ISG.SUBJ-言う つつ  
 「子犬が私のそばに来たような気がしたように私は思って、またお前は綱を切って来たの、と私は言いながら…」

- (12) neun paye-an humi ne ya ka  
 どこへ 行く -1PL.SUBJ.INTR.LIT 感じ である か も  
 a-eramuskari kor payeka-an ayne...  
 1PL.SUBJ.TR.LIT-わからない つつ 歩き回る -1PL.SUBJ.INTR.LIT あげく  
 「どこへ私達が行くような気がするのかもわからずに歩き回ったあげく…」

- (13) ukuran mano anakne k-esna ka somoki,  
 昨夜 から は ISG.SUBJ-くしゃみする も しない  
 k-omke ka somoki kusu, tane omke  
 ISG.SUBJ-咳する も しない ので 今 咳  
 k-akkari humi ne kuni ku-ramu.  
 ISG..SUBJ.-やり過ごす 感じ である ように ISG.SUBJ-思う  
 「昨晩からは私はくしゃみもせず咳もしないので、今は風邪をやり過ごしたような気がするよう

<sup>12</sup> humi ne を「発話者の知覚を表す形式」とするのは過度に単純化した説明であり、なお検討が必要である。「名詞化辞+指定詞」という構造が ruwe ne 「のだ」のような「説明」を意味すると言われる形式と共通しており、より客観性の高い表現を形成している可能性もある。そうすると、その外側に推量の nankor が付加されることも説明が可能かもしれない。今後の検討課題としたい。

に思う。」

これらに共通するのは、*humi ne* が用いられると、発話者自身が感じている内部感覚を表す、ということである。ところが、興味深いことに、*humi ne* の後に *nankor* が付加されている例がある。

- (14= [4]) *tane sirsak humi ne nankor, sirpopke kusu.*  
 今 夏になる 感じ である だろう 暑い から  
 「今や夏になった気がするだろう、暑いから。」

(14)の訳を「夏になった気がするだろう」とひとまず訳したが、これは奇妙な表現である。発話者自身が現に感じている「夏になった」という、自分自身の疑いのような直接感覚の後に、「事態を不確かなものとして想像・思考・推論の中で捉える」機能を持つ「だろう」をわざわざ置くことが矛盾と考えられるからであろう。それでは、このような場合の *nankor* の用法をどのように考えたらよいだろうか。ここで手がかりとなるのが *humi ne* の後に現れる他の表現である。

- (15) *tane omke pirkano humi ne kuni*  
 今 咳 完全に良くなる 感じ である ように  
*ku-ramu wa.*  
 ISG.SUBJ-思う よ  
 「今や咳が完全によくなったような気がするように私は思うよ。」

- (16) *kane a-e-kore siri ku-nukar*  
 金 INDEF.SUBJ-2SG.OBJ-与える 有様 ISG.SUBJ-見る  
*humi ne pekor ku-yaynu ap*  
 感じ である かのよう ISG.SUBJ-思う たのに  
 「お前がお金を与えられている様子を私は見たような気がしたかのように思ったのに。」

*humi ne* 「気がする」の後に現れる *kuni ramu* 「ように思う」、*pekor ramu* 「かのように思う」はいずれも発話者の主観的な思考活動を表す表現である<sup>13</sup>。これらと *nankor* は同様な文脈に立ち、共通する分布を持つわけである。従って、意味的にも共通する意義特徴を有するはずである。それでは、*kuni ramu*、*pekor ramu* が表す意味とは何であろうか。ここで特徴的なのは、ともに「思う」という表現を含んでいる点である。森山他(2000)に依拠して、「ように思う」、「かのように思う」をモダリティ表現の中に位置づけるとすれば、「確信」のモダリティとするの最も適切であろう。2節で述べたように、「確信」とは、「事態を想像、思考、推論の中で捉えるが、事態成立を

<sup>13</sup> *kuni* (*kunak* という形式が用いられることもある)、*pekor* の機能はさらに検討を要する。ここでは仮に「婉曲」のような機能を果たしているものと考えておく。

主張し得るものとして捉える」モダリティである。この場合、「ように」、「かのように」に当たる比況の形式を含んでいるので、確信の度合いはその分、低いわけだが、事態成立を主張する「確信」の表現の一種であることには変わりがないと思われる。すなわち、*nankor*は、「概言」のモダリティの中の「推量」というモダリティから、「確言」のモダリティの中の「確信」に及ぶ用法を持った形式、と位置付けられることになる。このことは、森山他(2000)のモダリティの定義によれば、「確信」と「推量」が、「確言」と「概言」という根本的に異なるモダリティにそれぞれ所属しつつも、共に「想像、思考、推論の中で事態を捉える」という特徴を共有していることを考えれば、意味的に連続する特徴を持っていると行うことができるので、それほど突飛な考えとは言えないと思われる。ただ、「推量」は事態成立を疑う形式であるのに対して、「確信」は事態成立を肯定する、という点が異なるわけである。

さて、これまで述べた *nankor* に関する仮説を、実際のアイヌ語の例に適用するとどうなるのか見てみることにする。まず、発話者の直接的感覚を表す *humi ne* 「気がする、感じがする」の後に *nankor* が現れた(14)のような例であるが、*nankor* を「推量」のモダリティと考えると矛盾が引き起こされるが、「確信」は事態成立を肯定する形式なので、矛盾は生じない。「確信」の解釈を取り入れて意識すれば、「今や夏になったような気がするように私は思う」ということになるだろう。また、事態が確定した過去の事実である(6)のような場合も、「確信」の解釈を適用するとやはり矛盾は生じないことがわかる。意識すれば、多少くどくはなるが、「昨夜が一番寒かったような気がしたように私は思う」となり、少なくとも意味的不整合は回避される。もっとも、このような *nankor* の用例が少ないのは、*nankor* が「確信」に傾斜したモダリティ的意義特徴を有していたとしても、「推量」のモダリティ的意義特徴も有しているため、誤解や矛盾の恐れが少ない文脈でないとペナルティ度の高い表現となってしまう恐れが高いためだと考えられる。すなわち、*humi ne* に *nankor* が後続できるのは、*humi ne* が発話者の直接感覚を示す表現であることが明らかであるために推量の解釈が選択されず、確信の解釈が優先されるので結果的に誤解の恐れが低い文脈であるからだと説明できる。なお、*nankor* が過去の事象に対して用いられた(6)の例が可能なのは、この例の場合、*humi ne* のおかげで *nankor* の「確信」解釈が成立しやすく、確信のモダリティは推量のモダリティと異なり、確定した過去の事象との意味的不整合を引き起こさないためであると思われる<sup>14</sup>。

<sup>14</sup> なお、「確信」の他に、「徴候性判断」も過去の事象と共起可能なモダリティとして候補に上がるが、ここではその考えはとらない。徴候性判断は「事態の成立を、体験によって直接的に捕捉したのではなく、自らの想像・思考のや推論の中に捉えたもの」(森山他 2000: 95)であるから、やはり状況を直接捕捉した表現である *humi ne* と共起するモダリティとしては不適当と考えられる。自らの体験に関してならば、徴候性判断表現(「ようだ」)を用いた「?おいしいようだ」は何らかの証拠から推論によって事態成立を捕捉したことになり、自らの体験ではないかのおかしさを感じられるであろう。これに対して、確信表現(「ように思う」)を用いた「おいしいように思う」という解釈は、自身の体験にも適用可能であり、より合理的な説明であると思われる。

<sup>15</sup> 全くの憶測であるが、本稿の結論によれば、田村(1960)の「太鼓はあっただろう」という例も、推量の表現というよりは「太鼓はあったように私は思う」という確信表現であると説明できる可能性がある。もっとも、「(アイヌ文化に)太鼓はあるだろう」のように、超時間的な一般的な真理として述べている、と説明できる可能性もあり、問題はそう簡単ではない。今後の検討課題としたい。

## 6. おわりに

本稿では、千歳方言の資料の分析に基づき、主に以下の諸点を指摘した。

1) nankorは日本語の推量のモダリティ形式「だろう」と高い共通性を示す。特に確定した過去の事象と共起しにくい、という特徴を持つ。

2) nankorが「だろう」と明確な「ずれ」を示すのは、humi ne「気がする、感じる」のような発話者の直接感覚を示す表現と共起可能であるという点である。このことから、nankorは「推量」のモダリティから「確信」のモダリティへ傾斜した意義特徴を有することが推定される。

3) 従来指摘されていた確定した過去の事象に用いられたnankorの用法は、特別な条件が満たされている場合(nankorの「確信」解釈が文脈から保証されているような場合)にのみ可能な、例外的な表現である可能性がある<sup>15</sup>。

複雑微妙なモダリティの分野に関しては考察が必要な問題が山積しており、本稿の結論がごく大雑把な憶測、仮説に類するものであることは自覚している。特に、過去の事象に用いられたnankorの問題は例が少なく十分な考察ができておらず、ruwe ne、humi neのような関連するモダリティ諸形式の分析も極めて不十分である。今後とも用例の収集に努め、考察を深めて、仮説を検証していきたいと考えている。

## 参考文献

- 知里真志保. 1936 [1974]. 『アイヌ語法概説』。(『知里真志保著作集』4所収, 東京: 平凡社.)  
知里真志保. 1942 [1973]. 『アイヌ語法研究』。(『知里真志保著作集』3所収, 東京: 平凡社.)  
福田(田村) すす子. 1960. 「アイヌ語沙流方言の助動詞」. 『民族学研究』24-4. 343-354.  
加藤重広. 2006. 『日本語文法入門ハンドブック』, 東京: 研究社.  
萱野 茂. 1996. 『萱野茂のアイヌ語辞典』, 東京: 三省堂.  
金田一京助. 1931. 「アイヌユーカラ語法摘要」. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東京: 東洋文庫. 1-233.  
益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』, 東京: くろしお出版.  
宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃. 2002. 『モダリティ』, 東京: くろしお出版.  
森山卓郎、仁田義雄、工藤 浩. 2000. 『モダリティ』, 東京: 岩波書店.  
中川 裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』, 東京: 草風館.  
奥田統己. 1990. 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』, 札幌: 札幌学院大学.  
Palmer, F. R. 1986. Mood and Modality. Cambridge: Cambridge University Press.  
佐藤知己. 2008. 『アイヌ語文法の基礎』, 東京: 大学書林.  
田村すす子. 1984. 『アイヌ語音声資料』1. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すす子. 1985. 『アイヌ語音声資料』2. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.

- 田村すず子. 1986. 『アイヌ語音声資料』3. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すず子. 1987. 『アイヌ語音声資料』4. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すず子. 1988a. 『アイヌ語音声資料』5. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すず子. 1989. 『アイヌ語音声資料』6. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すず子. 1988b. 「アイヌ語」. 『言語学大辞典』1. 東京: 三省堂. 6-94  
田村すず子. 1992. 『アイヌ語音声資料(1~6)語彙』中巻. 東京: 早稲田大学 語学教育研究所.  
田村すず子. 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京: 草風館.

## A Semantic Analysis of a Modal Auxiliary Verb *nankor* in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi SATO

### Summary :

The Ainu modality system still contains many problems to be solved. The meaning of a modal auxiliary verb *nankor* is one such problem. This form exhibits strong similarities to a Japanese modal auxiliary verb *daroo*: 1) they are both presumptive; 2) they are both subjective (i.e., hard to be nominalized); 3) they are both different from evidential expressions or possibility expressions; 4) they are both hard to use with a verb expressing a past event. This comparison of *nankor* with *daroo* shows that the claim about *nankor* by previous studies proves to be doubtful that it can be freely used with a past expression. However, *nankor* and *daroo* do not entirely agree: *Nankor* can indicate a modal meaning closer to "belief" rather than mere presupposition, since it can be used after an expression for a speaker's direct feelings in much the same way as other belief expressions like *kuni ramu* 'to think so, to believe so' or *pekor ramu* 'id.'. This semantic feature is sharply different from that of the Japanese *daroo*.